

鵜戸神宮：神橋

神橋を渡ると、参拝者は鵜戸神宮の最も聖なる場所である本殿に足を踏み入れます。本殿は、岩に彫られた急な階段を下りた先にある洞窟の中に鎮座しています。昔は、参拝者は橋のたもとで履物を脱ぎ、本殿までは裸足で進んでいました。これにより、神聖な地面が外界の不純物で汚れることを防げると信じられていたのです。この慣習は既に廃れてしまいましたが、参拝者には、橋の向こうでは聖地にふさわしい態度で行動することが期待されています。

橋の近く、本殿を正面から見て参道の左側には、数多くの石灯籠が建っています。これらは飢肥（現在の宮崎県南部の海岸地方）藩主である大名の伊東家から贈られたものです。伊東家は江戸時代（1603～1867）、鵜戸神宮を崇拝し、その維持のために資金を提供しました。灯籠の火袋（火を灯すところ）は一つ一つ形状が異なり、月相を表しており、伊東家の家紋—1つの球体がより小さな8つの円で囲まれ、インド仏教思想の宇宙を象徴している—で装飾されています。